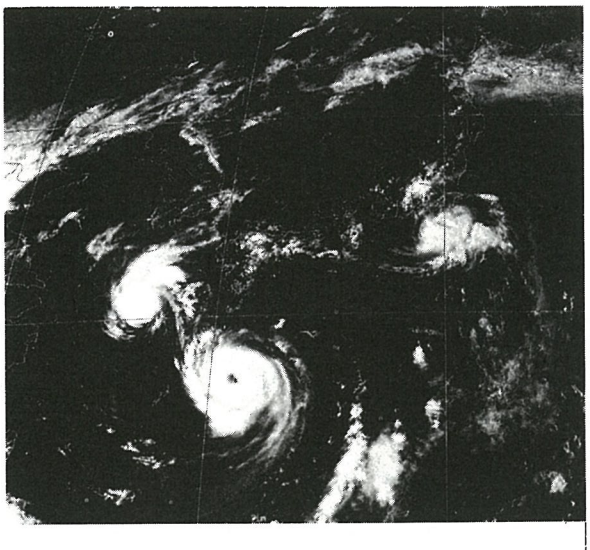
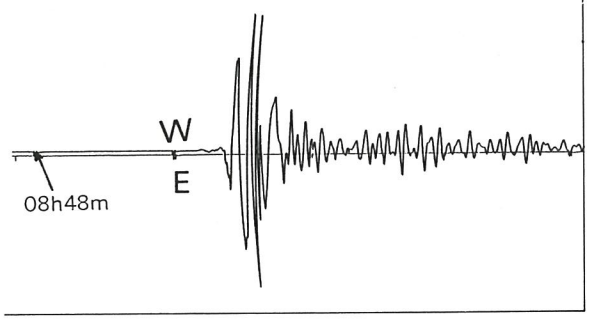
特集 災害に備える

8月30日～9月5日は「防災週間」。9月1日は「防災の日」です。

豊かな水に恵まれ、四季の変化の美しい日本。しかし、その一方で、台風の通り道に当たり、地震が多いという"泣き所"を抱えていることも忘れてはなりません。

9月1日は「防災の日」。8月30日から9月5日までは「防災週間」です。この機会に、台風と地震に対する日ごろの備えを、もう一度見直してみてはいかがでしょうか。





▲上の写真は、昭和60年8月30日、気象衛星ひまわりがとらえた台風12号、13号、14号(左から)の衛星画像。下のグラフは、地震計がとらえた「昭和59年長野県西部地震」の東西の揺れ。

台風に備える

正しい情報をより早く

怖いものの代名詞といえば、「地震、雷、火事、おやじ」と昔から相場は決まっています。では、なぜ台風はこの中に入っていないのでしょうか。

台風が、地震や雷といちばん違うところは、他の災害が突発的に発生するのに対し、台風は規模や進路などをある程度予測できることではないでしょうか。言い換えれば、正しい情報をより早く知り、備えができれば、台風の被害は最小限にくい止められる、といえるのです。

ところで、台風の進路予報図の表示方法が、今年の六月から新しく変わりました。いざ、台風が近づいてからあわてふためいたりしないよう、前もって正しい見方を覚えておきたいものです。防災の第一歩は、日ごろの備えと正しい情報の入手にあることをお忘れなく。

台風の新しい進路予報

暴風警戒域に注目しよう

今までの進路予報の表示方法（図―A）は、十二時間後、または二十四時間後に台風の中心がくると予想される地域を「予報円」として、破線で表していました。この表示方法の欠点は、予報円が暴風の吹く範囲と勘違いされやすいことでした。つまり、破線の外側なら安全――という錯覚を起こしやすかったといえます。

新しい表示方法（図―B）は、これまでの予報円の表示のほかに、暴風域と暴風警戒域を実線で付け加えたものです。暴風域とは、平均風速毎秒二十五メートル以上の暴風が実際に吹いている範囲。暴風警戒域とは、予想時刻に暴風域になる恐れのある範囲です。台風の中心や暴風域が、予報円、暴風警戒域の円内に入る確率は、ともに六〇％となっています。

また、暴風域の外側には、風速十五メートル以上の強い風が吹く「強風域」が必ずあります。暴風警戒域の外側だからといって、決して気を緩めることのないよう注意してください。

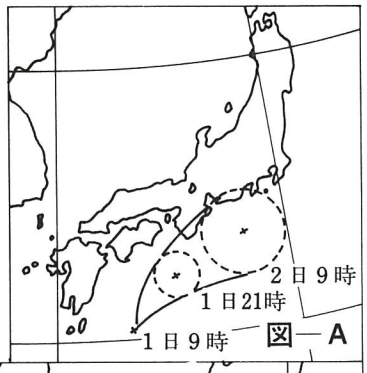
自分勝手な判断が被害をより大きくする

ところで、これまでの表示方法では、予報円の中心に×印が付けられていました。台風の中心が×印に来る可能性が一番高いことを表したものです。

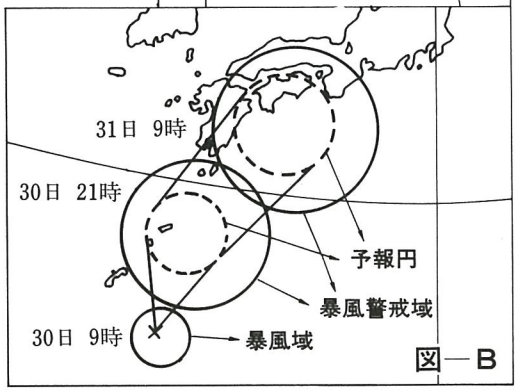
しかし、この×印があると、台風の中心が必ずこの位置に来るものと誤解されやすいため、新しい表示方法では省略されました。

台風の進路や勢力は、まるで生き物のように変化します。朝の予報では、上陸しないとの見通しも、午後になってから急に進路を変えて上陸――ということも無きにしもあらずです。

ですから台風情報を一度だけ聞いて、自分で勝手に判断を下すのは大変危険です。被害を大きくしないためには、次々に出される予報を注意深く聞いて、その都度判断するようにしたいものです。



図―A



図―B